

注意書き

本作品はあくまで架空 のことをえがいたものであり、現実に存在するいかなる人物や組織とは関係がありません。また、この小説は大人向けのものであり、子供は読むべきではありませんし、子供に見せるべきでもありません。

加えて、作品内で描かれる描写の多く、例えば女性の同意を得ない性行為、暴力的な性行為は女性への性行為は実社会で実行すると刑法によって厳しく罰せられます。同意を得たパートナーとの行為であっても相手を傷つけたり、自分が社会的に傷ついたりする可能性があります。

目次

(ひと通り見た人向け)

YUKI 04/01 RIVAL
080 PERIOD 000
1
FOULS FOULS
00 00

ゆうくん (彼氏)
視点

新生活



今日から俺とサツキとの新しい生活が始まる。大学進学のために上京して、今日からこのパートが新しい生活の場所だ。

でも、まだ大学生だし、同棲ってわけじゃない。アパートの隣り合った家屋を借りただけだ。地元でも隣同士だったのと同じってだけだ。

「実家出るとして少し緊張するね」

「大丈夫だって。」

困ったら俺が助けてやるから」

「ゆうくん家事得意だもんね、

ヨロシク！」



「サツキも家事くらい覚えろよ。」

女子なんだし」

「え〜、メンドイよ。」

ゆうくんがやってくれるからいいじゃん」

いつも通りサツキがそう元気にこたえる。カップラーメンくらいしか作れないのに、一人暮らしなんてアイツ大丈夫なんだろうか。まっ、その時ちよっとくらい助けてやるか。

「その荷物、重そうだね。
ボクが持つよ」

「え、大丈夫だって」

「ホラホラ、

ゆうくん小さいんだから無理しない！

ヨイショツと！」



「ボクに女らしく料理覚えろっていうんだったら、
ゆうくんこそ少しは体鍛えたらどうなの」

あゝ

そういわれると

立場ないな」

サツキは俺の幼馴染で一応つきあっている。一
応…というかもう3年だから結構長い関係か。
小さい時から家が隣で付き合いがあったせい
で、付き合い始めても関係は変わらなかったけど。

サバサバしていて男っぽいサツキは昔からかっこよかった。

一方俺はと言えば背も低くて、運動より菓子作りのほうが得意だった。中学からサツキがバスケット部に入って活躍し始めると、よく差し入れに手作りのおやつを持っていったりした。

そんなんだから告白もサツキからだった、

「あんまり女の子っぽいじゃないけどさ、ボクたち付き合わない？」

ゆうくんのこと

好きになっちゃったかも」

お互いドキドキしていたのをよく覚えてる。

バスケの試合の後だった。

華麗にダンクシュートを決めるサツキは当時からカッコよかったし、今でも一生懸命なサツキのことが大好きだ。

「コラ、引越しサボっちゃダメだよ。」

ホラ、片付け手伝ってよ」



翌日、大学が始まる。

「一緒に行こっか」

「……うん」

「えへへ、

なんだか新鮮だね。

高校の時は一緒に学校行けなかったから」



スラッとしていて女バスのキャプテンだったサツキは、学校でも女子から人気が高くてつきあっていても、俺の居心地が悪い事が多かった。

だから普段はあまり一緒にいれなかった。きっと今後はそんなことはないんだと思う。これからの新生活に自然と顔がにやける。

「ゆうくん、なんか顔がにやけてるよ。

なんかちよっとキモい……。

ホラ、

学校に行く前にシャンとしなって！」

入学式が終わっていくつかのガイダンスの後、構内のあちこちでいろいろなサークルが新入生を勧誘している。

「やっぱ、高校とはぜんぜん違うね」

「うん、規模が違うしいろいろなサークルがあるな。でもサツキは決まってるんだろ？」

「あ、やっぱリバレてる？」

「そりゃーな！」

「このあたりのはずなんだけどな」

あ、あそこだ！

センパイー！



「サツキじゃん」

元気してた？

もちろんウチの女バスに来るんだよね？」



「一つ年上のサツキの先輩のヤヨイさんだ。二人がバスケットークを始めると途端に俺の居場所がなくなる」

「ヤヨイさん変わったような。色っぽいと言っ
か……。胸元とか見えてるし……」

これが大学デビューか？」

「へへ」

まだユウキ君とつきあってるんだ〜」

「もう！」

センパイ、そんなことよりどうして最近活
躍してないんですか？センパイなら大学でも
活躍するって、ボク信じてたんですよ」

「ひひひひひ」

大学生活ってイロイロ忙しいのよ」

「ヤヨイ、

女バスの方はどうよ？」



なんだか、軽薄そうないケメンが現れた。何だ
コイツ、サツキに見えないところでヤヨイさんのお尻を触ってるぞ。

「このチャライのが男バスのキャプテンの
ハヤトくんよ！」

「ういーっす！」

男バスキャプテンのハヤトっていーまーす」

「えええ！」

ハヤトってあの国体で伝説の？」

「恥ずかしいなあ、

オレの事知ってくれてるなんて

もつと話したいんですけど、今忙しいんで、新
歓に来てよ。男女バスケ部合同なんで」

完全にサツキのスイッチが入ってしまった。
俺としては行ってほしくないのに……。顔まで赤
らめてうなずくサツキ……。

数日後、新歓の日。

「サツキ、

早く帰ってくるんだぞ！」

「あと、

お酒は飲まない」

「あのナントカつてセンパイには注意するんだぞ」



「あー、

ハイハイ、

ゆうくん心配し過ぎだよ。お母さんみたいよ」

「ハヤトさんね。

大丈夫だって！

セクハラもゆうくんの見間違いじゃないの？」

「サツキ！」

「ゆうくん、

ちよつとうるさいよ。

バスケ部のことなんだから、少しは信頼してよ！」

なんだかギスギスした空気でバスケ部の新歓に送り出してしまった。不安が募る。

だが、その夜深夜を過ぎてもサツキは帰ってこなかった。きちんとサツキが帰ってきたことを知りたくて俺はサツキの部屋と接している押し入れの中にいた。

ストーリーカーじみているとは思う。でも電話はつながらないし、メールの返信もない。ケンカみたいないな感じで別れてしまったからサツキの部屋に押しかけにくいし…。

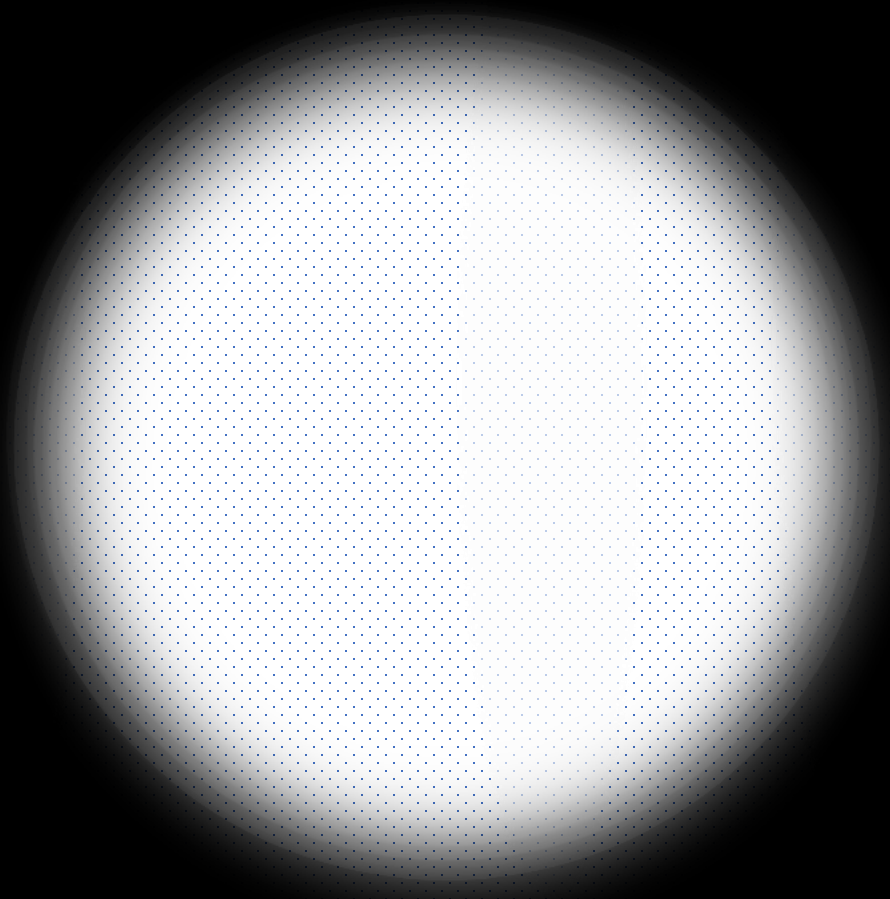
押入れの中を探っていると偶然俺はとんでもないものを見つけてしまった。

穴だ。壁に小さな穴が空いている。穴の向こうが暗いからサツキはまだ帰ってきていないとわかる。

俺は最低だと思いつつも不安から、その穴を覗きながら一晩を過ごした。

きつと終電をのがしたサツキは女バスの先輩の部屋とかに止まっているんだと自分に言い聞かせながら。

翌朝、サツキが帰ってきた音を聞く。だけれど、昨日の別れ際があんな感じだったから声をかけにくい。



結局その後も数日間俺たちはギスギスしたままだった。



サツキ視点

新歓コンパの夜

「みんな、今日は男女バスケット部混合新歓のみに来てくれてありがとうだね！」



「大学生活、サークルとか勉強だけじゃないよ！恋もチョー大事！
ってことで初めての飲み会楽しんでね！」

カンパニー！

「「ウェ〜〜イ」」

ゆうくんったら心配し過ぎなんだから。センパイもいるのに間違いないかなあるわけ無いじゃん。

カンパニー



でもセンパイ少しエッチだな。
まっ、飲み会って言ってもオレレンジ
ジュース飲んどけば間違いないし…。

「サツキい、
飲んでる?」

「はい」

「それオレンジジュースじゃん。
ホラこっち飲んでみなよ」

「あ

この間の子じゃん

チーツス!」

「ナニナニ!お酒デビュー?」

「ジュースみた
いなもんだよ。

飲めばわかるって」

「ハヤトくんはサツキの
バスケット見せちゃいなよ!」

「え、でも……」

「オレもサツキのちよっといいいトコ
見てみたいな」

「アタシも！アタシも〜！」

サツキのちよっといいいトコみてみたい！

サツキのちよっといいいトコみてみたい！！

ちよっといいいトコみてみたい！！

「イツキー！！」

「イツキー！！」

「イツキー！！」

これ飲まなきやいけな
いの？！
センパイたちが見てるし…

結局飲まされちゃった。確かに甘くて
ジュースみたいだけど…。

「でも、ボクお酒強いかも」



見透かしたようにその時センパイと
目があった。

「イツキで終わらば女バスがすたる！」

「ニツキ！」

「ニツキ！」

「ニツキ！」

「ニツキ！」

「ニツキの菓子！」

結局その後何度も一気飲みさせられた。

「ゴメン、ゴメン」

ちよつとチヨージ
のって飲ませすぎたわ」

「サツキちゃん強いね。
普通の女子だったら
とっくに
潰れてるよw」

「まだ」

いへますって〜」

ぽん〜

チヨ

なんだかセンパイが近い。
カツコいいなあ…

「ハハハハ」

結構酔ってるじゃん!

水飲ませてやるよー!

「え?」

ちゅっ

「やめてください、
センパイ!」

え、

今キスされたね

「やめてって、
オレただ水ませて
あげてるだけじゃん」

「後輩のことを気遣ってってヤツ?
わからないかな、このセンパイ心」

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ホント、
大丈夫ですから」

「やめてくださいー!」

「イヤ
だって!」

「いやいや、

サツキ結構暑そうじゃん」

むに
むに

「酔を覚ますにはすこし体
冷やしたほうがいいって」

「おっ! なかなか引き締まって
イイ体してるじゃん」

「下の方も御開帳〜!」

「やめてください
ってば!」

「コラコラ、
抵抗するんじゃないってー。
センパイの気遣いじゃん」

「サツキの体
すげー熱いじゃん。

酒?

それともお?」

ヤバイ、
お尻先輩の足で抑えられ
てて逃げられない!

ゴウ
ゴウ
ゴウ

むい
むい

「センパイ、
ボク彼氏いるんだよ！」

「へー、彼氏持ちなんだ
だから？」

「オレ、酔った後輩を助けて
やってるだけだし」

「まさか、センパイのマッサージ
でかんじちやってるのかよ？」

カクカク

くにくい
くにくい

ヒリ
ヒリ

ゴソ
ゴソ

「ひやあつ…」

んん、

そんなこと…ないよお

…んん

い

い

キキ

「ほら、水もって飲めよ」

「やめて…」

「やめてくださいよお…」

ぢゅるるるるる

みこ
みこ

やばい、
フラフラして
抵抗できない…

「あ、ごめくん、
テキーラだったわ

なんかいい匂い
センパイ…、
男なのに香水してる

「つか、サツキの下の方は十分
潤ってるからいいんじゃないやね？」

「んっあっ…
せっ、センパイ助けて」

ヤヨイ
センパイ

「サツキ大丈夫？」

「ヤヨイじゃん。
コイツヤれるトコまで
連れてくの手伝えよ」

「おっけー」

ふわふわとしてはつきりし
ない意識の向こうでセンパイ
たちの声が聞こえる。

「サツキ、
ハヤトくんすごい
から楽しんでね」

はあ
はあ
ああ
ああ

くにく
くにく

「イヤです!!」

「ボクもう帰ります!!」

「あれあれ、

サツキ帰るんじゃないかなかったの？
酔っちゃったのかな」

「酔っちゃったんだったら、
ウチで休んでけよ。
すぐ近くなんだわ」

「そーそー
楽しんじゃいなよ」

「おっけー」

「ヤヨイ、手伝え!」

「パーティードラッグたっぷり入れといた
からな。

「バスケット部の筋肉バカでも動けねーっての」

……え、なんか揺れている気がする。たくましい男子の腕に抱かれているような……。

「いやあ、

新歓のお楽しみってやつだわ」

「おい、起きろ」

ゴング
ゴング
ゴング

「えっ!?!」

「いっは…」

「オレんちにいらっしや〜」

「もっと、酒飲まね?」

「それとももっとやばいやつのほうが
サツキ好きだったりするw」

「ひやあい!」

やめてよ!

ボク彼氏いるんだから
帰らせてよお!

だめだ…フラフラしてぜんぜん
立ち上がれないよ!

「いやここでやめちまったら男
じゃないっしょ！
ってか、彼氏以外の男の部屋で
グチュグチュに濡らしちゃってる
サツキ実はビッチじゃね？」

「ひゃあ…
やめって、

ビッチじゃないんだから！」

「え、

ここもうこんなにでき
あがってるじゃん」

「ぬがさないですよ！」

じわ～

「へ、
女子にしては結構
鍛えてるじゃん」

「締めり
良さそうだわw」

逃げないと！
本当に全力を出さないと！
クツ…体が動かない…

ぬぎぬぎ

ひくひく

XPolaris

「ハハハ、

男のベッドの上で股開いちゃまって、
さそってるのか？」

「嫌なら、
足閉じてみるよ」

「何飲ませたの？」

動けないん
だって！」

「くっそ、
ガチ勃起し
ちまうわ」

「足閉じないな、
っーことで
和姦成立！」

サツキの
初浮気エッチじゃん。
せいぜい楽しめや」

「ムヤムヤ」

なに…あれ…
おおきすぎるよ」



「おいおい、随分ぬれてるじゃねーかw」

「サツキのここトロトロだぜ。オレのチンポ浮気汁すっげーかかっているし」

「んっ、違うってええ」

ヤバい：：
パンツ越しでもわかる
熱いし、
太い：：

「ひやあああん！」

「クリちゃんこんなに勃起させながら言っても説得力ねくしww」

はあはあ...あかあ

なんでボク、こんなにドキドキ

しているんだろう...

「ハハハ、

新入生のマンコの味見する時、サイコーに
バスケやっててよかったって感じるわ」

「最低だよ、
センパイ……」

「そんなこと言っ
てられんのも今の
うちだけだぜ。」

んあっ！

すぐにすげえ
気持ちよくして
やつからな」

ド
コ
イ
ノ
イ

気持ち悪いの
入ってきてる……

ん
はあ
はあ
はあ
はあ

熱い……

逃げられない……

ごめんなさい……ゆうくん

ボク……裏切らされちゃってる。

「すげえ！」

お前のマンコトトロでオレのチンポ超歓迎して、吸い付いてきてきやがる！」

「サツキマンコ、オレのチンポにラブラブじゃね？」

「歓迎いい…んっ…してない…」

ひゃああー！」

だめなのに…ボク…ゆうくんじゃない人に犯されちゃってる。

ひゃあッ
あふうらん

「や…あんっめめよおお…んふうら」

「ああっ！」

クソ気持ちいいわー！」

「そんなじゃ、
後輩の乳の実り具合でも
見ててやりますかw」

「おいおい、
なんか物足りなさーだな」

クツ…コイツ、急に
浅くしてきた…

「そんなことない…
ん…ひゃっよおお！」

「乳首勃てながら何がいや
だっつーんだ、キモチイイ
だろーが、ええ？」

「んんんっふ…
き、気持ちよくな
んか…ひゃああ…
ないいいい

いやっ…

あんっっ！

やめっっ

ふはああっ
てええ」

「ピヤハハ、おもしろえわ！
サツキの弱点発見しちゃったわ」

ゴゴ
クク
ゴゴ

くにゅ
くにゅ

「んあっ
…ふう」

「乳の方はもっと
育てたほうが
いいんじゃないの」

「超ビンカンだけどな」

「ひゃっ
あ…！」

「いやっ…」

あんっっ！

やめっっ

ふはああっ

ムええ

「あんっ」

はあ…はあ…はあ…

コイツ、わざと浅いところに…
くやしいけど…うまい…



「とりあえず、
一発イカせてやるよ。
オレらの相性最高
みたいだしな」

「ひびっ！」

んんんん！

あぁんあつ...あぁあ！

我慢してるのに...
声が出ちゃう

「オラ、

女バスの新人！

先輩にマンコで
ついてこい！」

「ひゃあああ！
い...やああ！」

変だ...こんなのおかしいよおお...。
だめなのに、だめなのにいい
これ太くて、熱くて凄いい！
おかしいのおお、こんな奴嫌いなのにいい

「ここをな、
こういう風に出
くと、めっちゃ
いいだろ」

「ひゃっんああ！

よくない！

よく…

ないよ
おおほおお
ああんん」

熱い！熱いよ！
ゆうくん…ごめん！
ゆうんじやないのに、
ボクおかしくなっ
ちやってる。

「犯されながら必死
で反抗するのも
チヨロかわいいわ！

なんつーの？
もっと犯してオレのものに
してやりたくなるんだわ」

「サツキに一発目は
とりあえず合わせて
やっからな

一緒に行くぜ。
ラブラブでw」

「あっ

…んん

ラブラブ
じゃ…ないい」

「お前のマンコは
オレのチンポに
嬉しそうにキスし
てきてるけどな」

「オラ、
イクぞ」

あひゃあひゃあ
あひゃあひゃあ
あひゃあひゃあ
あひゃあひゃあ

クワッ
クワッ
クワッ
クワッ

こんなの…、
こんなの知らないよ
なにこれ、ヤバイ…
怖い…怖いのに
キモチイイ！
ボクおかしく
なっちゃってる

「オイオイ、イク時にイクも言えないなんて羨がなってねえな」

「っつか、いきなり意識飛んでんじやねえかw」

「ザコっ！」

ザコ
マンコw」

「っかし、

穴の締め付けすげえいいわ。これだから女バスハメるのやめられねえわ」

「オレのチンポのために今までマンコ鍛えてくれてあざーず！」

もう、バスケとかいいんでおとなしくこれからチンポ扱き係ヨロシクwww」

今まで感じたことのない圧倒的な感覚。

何かひどいことを言われてる気がするけどわからない。心地いい快樂と振動に全部身を任せてしまいたい。

その後、ボクはずっと犯された。どんなに抵抗しても、センパイの太い腕で抑えられると敵わない。ゆうくんじゃないのに…、むりやりなのに…気持ちよくなってしまうた。まるで道具みたいになンボクを犯すセンパイの腕の中で気持ちよくなってしまうたんだ。

「可愛い写真いっぱい撮ったからな」



「新歓一発目でお持ち帰りされてあんあん喘いじゃうような、股ゆるゆるビッチだった彼氏にバレたくないだろ。」

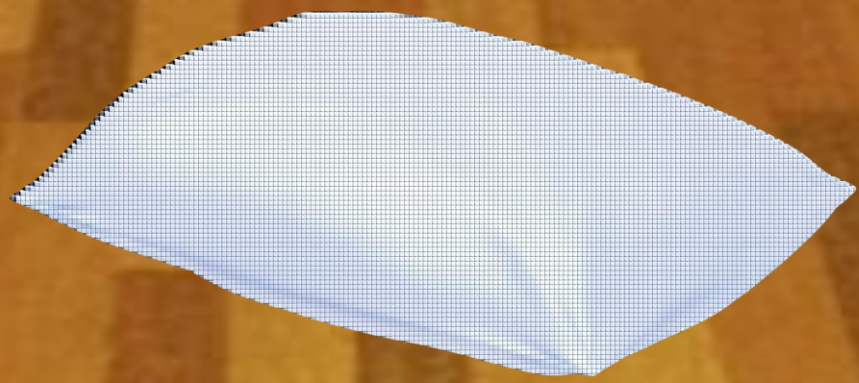
だまつとけよ

「死ね！」

「ハハハ、まだ元気あんじゃん！これからも下手くそ彼氏くんの代わりにオレがコーチングしてやっからなwww」

そうセンパイは言っボクを帰した。汚れてしまったボクをゆうくんの隣の部屋に。

YUKI 04/15 HAYATO
080 PERIOD 009
1
FOULS FOULS
01 03



ゆうくん (彼氏)
視点
デート

あの日、バスケット部の新歓の日からサツキの様子がおかしくなった。ちよっとギクシヤクしていると言うか、普通っぽく見せているけど、サツキのことだからバレバレだ。

「なあ、

この間の新歓なんかあった？」

「……うーん

……特に……

……なにもないよ。

……フツウ、フツウ……」

「いや、

絶対なんかあった
だろ。隠すなよ」

「本当になにもないって。
ゆうくんしつこいよ」

何よりあんまりバスケットの話をしなくなっちゃった。こんなこと今まで一度だってなかったことだ。こりゃ相当深刻だ！



だから俺なりに彼女の気分転換を考えることにした。

「おっい！」

ちよっと一緒に買い物でも行かない?」

「ん?」

いいけど、

何買いに行くの?」



「なんでもいいけどせっかく都会に来たんだから渋谷とか言ってみようよ」

「……………いっよ」

「デートだからな?」

「わかってるって。」

ゆうくん、

何を改まって、

変だよ!」

へんなのはお前のほうなんだけどな…。でも久しぶりにサツキが笑顔になった気がする。

「うわー、

本当にボク達
東京に来たんだね」

「迷いそうで怖いな…」

人多いし」

「もう、

ゆうくん！こういう時は男子が

リードするもんだよ」

「だってサツキの方がそ
ういうの得意じゃん」

「もう、

わからないかな
ボクの乙女心」

「お、サツキじゃん

最近見なかったけど元気してたか」

ハヤトだったか。新入生勧誘の時にいたガ
ラの悪いセンパイだ。いきなりサツキのこと
を呼び捨てにするのは体育会系の文化なんだ
ろうか。



「へへ、コイツがサツキの彼氏くんねえ」

「何なんですか？」

「サツキのセンパイですよね？」

「俺たち予定があるんで
おかまいなく」

「ここらオレの遊び場所なんだわ。案
内してやろうか」

「いや、ごうです」

「ヒヤアァン！」

「センパイ!!
やめてください」

「ちよっとサツキから離れてください!!
警察呼びますよ」

「センパイ、バスケできても
男として最低ですよ」

「ツチ…」

「サツキ、ヤヨイが心配してたぞ。
たまには顔を出してやれ」

「ゆうくん、

珍しくかつこよかったよ。

男を見せてくれたね」

「珍しくは余計だった。

ホント、何かあったら俺を頼れって。

頼りないかもしれないけど」

「ハハハ、だってゆうくんだしね。

でも、ボク、ゆうくんが頼れる男の子
だって知ってるよ」

「とりあえず今日は新しい枕ほしいから選
んでよ。頼りにしてるよ」

「なんで渋谷まで来て枕なんだ。まあ、
頑張っつて選ぶけどさ」